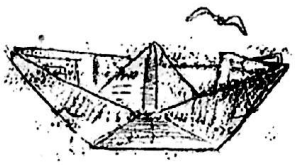
小諸なる古城のほとり、の動物園

木下直之



信州小諸は不思議な城下町である。浅間山からなだらかにおりてくる丘陵が、千曲川にぶつかってすとんと落ちるその尖端に、城が築かれた。断崖に食い込んだ幾筋かの谷は、そのまま天然の要害となって城の防備を堅固なものにしたはずだが、火山灰の堆積した地盤はいかにももろい。町は山側に広がり、城が町よりも低い。

城の建物は、大手門と三の門を除いて残ってはいない。城がその役割を終えたあと、明治十三年になって、旧藩士たちの手で本丸に神社が建てられた。歴代藩主の霊を祀るというこの神社は懐古神社、そして城址は懐古園と呼ばれた。このような動きはひとり小諸城にかぎらない。各地で、城址はいわば生者から死者のための場所へと変わり、草は生い茂り、石垣はゆるみ、その寂しさをいっそうつのらせることになる。

それから二十年が過ぎた明治三十二年に、島崎藤村が小諸義塾の教師として赴任した。六年に及んだ小諸での暮らしぶりは、『千曲川のスケッチ』に書き留められた。そこには、茶屋があり矢場があり、桑畠があり、「鶏を養う人なぞも住んでいる」のんびりとした懐古園の様子が描かれている。「小諸なる古城のほとり、雲白く遊子悲しむ」で始まる「千曲川旅情の歌」を口にすれば、風景の中へと静かに溶け込んでゆくようだ。

それからまた二十年が過ぎると、小諸城址の風景は一変する。大正十五年に動物園が開園したからだ。子どもたちの歓声と動物たちの鳴き声が城址に響き渡ることになる。

小諸は、東京、京都、大阪、和歌山、名古屋、甲府の動物園についで古いのだが、和歌山と並んで、城の中に動物園が置かれた早い例である。今なお健在、断崖を背にして、動物たちの小さな飼育舎が一列に並んでいる。

なぜ城の中に動物園があるのか、ずっと気になっている。小田原、飯田、高岡、和歌山、姫路にあり、かつては浜松、岡崎、徳島、高知にもあった。そのほとんどが戦後間もなくの開園で、日本の未来は子どもの肩にかかっているという、戦争に懲りたおとなたちの思いが各地に動物園をつくらせた。猛獣処分、すなわち空襲に備えて早々と猛獣を殺してしまった動物園人の苦い経験も新たな動物園建設に与かっていただろう。焼野原と化した町の真ん中には、うまい具合に城があったのである。

ところが、小諸城の動物園は別格、断然にその創立が早い。なぜこれほど大切なことが知られていないのだろうか。おそらくその答えは、動物園とはそういうものだからだというほかない。すなわち、知らない町の動物園のことは知らないままで終わる。多くの人は、自分の子どもや孫を連れて動物園に行くのであって、旅先の動物園は滅多に訪れない。したがって、それぞれの土地に刻まれた動物園の歴史にまで思いが及ばない。

私が訪れた日の晩から雪になり、翌朝、風景は一変した。城とライオンと雪景色というほとんどありえない組み合わせが、ここにはたしかに成立している。

（きのしたなおゆき・東京大学教授）

絵　酒井駒子